文脈依存度と日英語主語の比較：英語から自然な日本語への翻訳に焦点をあてて

佐々木　一隆

はじめに

筆者は、日本語とベトナム語の時間表現を巡り、意味と形式がどのように対応するかという視点から両言語を比較したことがある（佐々木 2005）。また、所属大学・大学院での研究指導を通して、アジアの諸言語や英語との比較の視点から、日本語を分析・考察することも行ってきた（佐々木 2019）。こうした経験から、日本語と英語に加えて他の言語も考察の対象に入れると、言語間で先行文脈や発話の状況への依存度が異なるという関係がより鮮明になることが分かってきた。一定の意味や状況をそれぞれの言語形式で表現しようとする際に、例えば動詞の時制に係る語形変化の有無など、言語間の表現形式上の差に応じて、先行文脈や発話の状況への依存度が異なるという関係がより一層明らかになってきたということである。

こうした視点から、江川（1991）「第 1 章 名詞」で特に「日本語と異なる英語の用法」（pp. 25-39）の英語の例文とその日本語訳を眺めると、同様に時制節における主語の義務性の差に応じて先行文脈や発話の状況への依存度が異なってくるという関係が明確になってきた。例えば、35 ページに I benefited much from my association with him.（彼との交際で得るところが多かった）のような例がある。逆に、日本語の例文に対応する英語訳を見ると、30 ページに「あなたが早くよくなるように願っています」（We are hoping for your quick recovery.）のような例が見える。すなわち、定形節に生じる主語は英語では基本的に義務的であるのに対し、日本語では対比や強調など特別な理由がないかぎり、主語を明示しないのが普通である。

本論文の目的は、英語で書かれた以下の 2 つの小説と 1 つのエッセイの原典がどのように自然な日本語に翻訳されるかを観察して、文脈依存度の視点から英語と日本語の定形節における主語の差について考察を試みることにある。

（1）OLD FOLKS’ CHRISTMAS by Ring W. Lardner, from *Fifty Great American Short Stories* by Milton Crane, ed（1965）

（2）*The Old Man and the Sea* by Ernest Hemingway（1952）

（3）Can monolingualism be cured? [Chapter 32] by Katherine Sprang, from *The 5-Minute Linguist: Bite-sized Essays on Language and Languages,* Second Edition, edited by E.M. Rickerson and Barry Hilton（2012）

小説については、第 I 節で Lardner, OLD FOLKS’ CHRISTMAS の加島祥造訳「古風なクリスマス」と Hemingway, *The Old Man and the Sea* の福田恆存訳『老人と海』を観察し、エッセイについては、第 II 節で第二言語獲得を扱った上掲書第 32 章の Sprang, Can monolingualism be cured? の筆者自身による訳「モノリンガリズムは矯正できるか」について観察する。第 III 節では、英語から自然な日本語に翻訳する際に見られる文脈依存度と両言語に見られる主語の相異について少し考察する。最後に「おわりに」で、本論文のまとめを行う。

I. 原典としての英文小説と自然な日本語訳

この節では、アメリカの風刺作家ラードナーの小説 OLD FOLKS’ CHRISTMAS の加島祥造による翻訳と、アメリカのノーベル賞作家ヘミングウェイの小説 *The Old Man and the Sea* の福田恆存による翻訳を取り上げる。

1. OLD FOLKS’ CHRISTMAS by Ring W. Lardner, from *Fifty Great American Short Stories*, edited by Milton Crane（1965）

まずは、作家 Lardner による英語の原文を見ることにする。なお、英語原文の下線とその左側に付記した下付き数字は筆者が施したもので、第Ⅰ節とⅡ節を通して同様に表記する。

1 TOM AND Grace Carter sat in their living-room on Christmas Eve, sometimes talking, sometimes pretending to read and all the time thinking things they didn't want to think. Their two children, Junior, aged nineteen, and Grace, two years younger, had come home that day from their schools for the Christmas vacation. Junior was in his first year at the university and Grace attending a boarding-school that would fit her for college.

2 I won't call them Grace and Junior any more, though that is the way they had been christened. Junior had changed his name to Ted and Grace was now Caroline, and thus they insisted on being addressed, even by their parents. This was one of the things Tom and Grace the elder were thinking of as they sat in their living-room Christmas Eve.

これら 2 つのパラグラフについて、加島祥造は以下のように翻訳している。なお、以下の日本語訳の下線とその左側に付記した下付きアルファベット（大文字）も筆者が施したもので、第 1 節と第 2 節を通して英語原文の場合と同様に表記する。

A クリスマス・イヴに、トムとグレイス・カーターの夫婦は居間の椅子に坐っていた。時たま言葉を交わしたり、何か読むふりをしたりしていたが、その間も二人は心の中でいくつか気のめいることを考えていた。カーター夫妻には子供が二人居て、一人は今年十九歳のトム・ジュニア、そしてその妹で母と同じ名のグレイスは二つ年下である。ジュニアは大学の一年生、グレイスは大学入学の準備をしてくれる寄宿学校へいって居た。この二人が今日、クリスマスの休暇で帰ってきたのである。

B 親子の名前が同じでは話を続けるのに不便であるから、今からは子供達の方をグレイスやトムと呼ばないことにする。もちろん二人の洗礼の時の名はトム・ジュニアでありグレイスではあったが、ジュニアはいつの間にか自分でテッドと名前を変えていたし、グレイスもカロラインという名に変えていた。そればかりか、両親に向っても、自分達をそう呼んでくれというのである。トムとグレイスの夫婦がクリスマス・イヴに居間に坐って考えていた様々なことのうちには、この名前のこともあった。・・・（『微笑がいっぱい』*There are Smiles* by Ring Lardner、加島祥造訳、新潮社、1970 年、p. 230）

英語原文の 1 と 2 はそれぞれ日本語訳の A と B に対応しているが、原文 1 は TOM AND Grace Carter という主語で始まり、2 行目最後の sometimes talking 以下は分詞構文として続き、全体として 1 つの文を構成している。これに対して日本語訳 A は 2 つの文で表現している点が対照的である。特に 2 番目の文の前半では、英語の分詞構文と同様に主語（Tom and Grace）を明示していない点では共通するが、時制節で主語のない動詞（言葉を交わしたり、何かを読むふりをしたりしていたが）が用いられている点で英語とは異なるのが興味深い。後半で「二人は」を主語として明記し日本語訳している点もおもしろい。日本語訳 B では、英語原文 2 が I won't call them Grace and Junior any more, ... のように語り手である主語 I を明示しているのとは異なり、主語を明示していない。文脈から分かるからであろう。

今度は途中を省略して、トムとグレイス・カーター夫妻による会話を観察することにする。夫妻がクリスマス休暇で帰って来るはずの長男がなかなか帰って来ないのを心配している場面である。

（中略）

"What time is it?" asked Grace, looking up from the third page of a book that she had begun to "read" soon after dinner.

"Half past two," said her husband.（He had answered the same question every fifteen or twenty minutes since midnight.）

3 "You don't suppose anything could have happened?" said Grace.

4 "We'd have heard if there had," said Tom.

"It isn't likely, of course," said Grace, "but they might have had an accident some place where nobody was there to report it or telephone or anything. We don't know what kind of a driver the Murdock boy is."

"He's Ted's age. Boys that age may be inclined to drive too fast, but they drive pretty well."

"How do you know?"

"Well, I've watched some of them drive."

"Yes, but not all of them."

5 "I doubt whether anybody in the world has seen every nineteen-year-old boy drive."

"Boys these days seem so kind of irresponsible."

"Oh, don't worry! They probably met some of their young friends and stopped for a bite to eat or something." Tom got up and walked to the window with studied carelessness. "It's a pretty night," he said. "You can see every star in the sky."

But he wasn't looking at the stars. He was looking down the road for headlights. There were none in sight and after a few moments he returned to his chair.

「何時？」とグレイスが、夕食の後すぐに『読み』はじめた本の三頁目から目を離してたずねた。

「二時半だ」トムは答えた。（彼は、12 時を過ぎてからは、十五分か二十分ごとに同じ質問に答えてきた。）

C「何かあったんじゃないでしょうか？」とグレイスが言った。

D「何かあったんだったら知らせがあるはずだよ」とトム。

「もちろん、そんなことないと思いますけど、でも、どこか、電話かけることも人に知らせることもできないような場所で事故を起して……。マードックさんの坊っちゃんの運転、どのくらいの腕前なのかしら。あなたも知らないでしょ」

テッドと同じ年だよ。あの年頃の子はどうもスピードを出しすぎるようだが、運転はうまいね」

「どうしてご存知？」

「連中の運転してるのをみたことがあるからさ」

「でも全部が全部とは言えませんわ」

E「十九歳の青年全部の運転ぶりを見た人なんて、この世の中にいるかね？」

「でも近頃の男の子は、なんだか、無責任みたいな……」

「何も心配することはないさ。多分昔の友達にでも会って、何か食べにいったりなんかしているんだろう」トムは立ち上って、わざとさりげない風をよそおって窓のほうに歩いていった。「きれいな夜だよ。空の星が一つ残らず見えるみたいだ」

しかし彼は星を見ているのではなかった。下の道路のほうを眺めて、自動車のヘッドライトを探していた。ヘッドライトはひとつも見えなかった。やがて元の椅子に戻った。（上掲書、加島祥造訳、pp. 233-234）

以上から、下線 3,4,5 の英語原文では主節の主語がそれぞれ You, We, I と明示されているが、対応する日本語訳 C, D, E ではいずれも主節の主語が明示されていないことが確認できる。やはり日本語のほうが言語内および言語外の両面から見て文脈依存度が高いことから、定形の主節において主語を示す必要がないと思われる。

2. *The Old Man and the Sea* by Ernest Hemingway

次は、作家 Hemingway による英語の原文を見ることから始め、そのあと福田恒存による日本語訳を確認する。英語原文も日本語訳も「中略」の前は状況説明であり、後は漁師の老人と少年との対話が中心になって話題が進んで行く。

6 He was an old man who finished alone in a skiff in the Gulf Stream and he had gone eighty-four days now without taking a fish. In the first forty days a boy had been with him. But after forty days without a fish the boy's parents had told him that the old man was now definitely and finally *salao*, 7 which is the worst form of unlucky, and the boy had gone at their orders in another boat which caught three good fish the first week. It made the boy sad to see the old man come in each day with his skiff empty and he always went down to help him carry either the coiled lines or the gaff and harpoon and the sail that was furled around the mast. The sail was patched with flour sacks and, furled, it looked like the flag of permanent defeat.

（中略）

Everything about him was old except his eyes and

they were the same color as the sea and were cheerful and undefeated.

“Santiago,” the boy said to him as they climbed the bank from where the skiff was hauled up. “I could go with you again. We’ve made some money.”

The old man had taught the boy to fish and the boy loved him.

“No,” the old man said. “You’re with a lucky boat. Stay with them.”

“But remember how you went eighty-seven days without fish and then we caught big ones every day for three weeks.”

8 “I remember, “the old man said. “I know you did not leave me because you doubted.

“It was papa made me leave. I am a boy and I must obey him.”

“I know,” the old man said. “It is quite normal.”

9 “He hasn’t much faith.”

“No,” the old man said. 10 “But we have. Haven’t we?”

“Yes,” the boy said. 11 “Can I offer you a beer on the Terrace and then we’ll take the stuff home.”

“Why not?” the old man said. “Between fishermen.”

以上の英語原文について、福田恒存による翻訳書『老人と海』（新潮文庫、1966 年）では以下のような日本語に訳している。

F かれは年をとっていた。メキシコ湾流に小舟を浮べ、ひとりで魚をとって日をおくっていたが、一匹も釣れない日が八十四日もつづいた。はじめの四十日はひとりの少年がついていた。しかし一匹も釣れない日が四十日もつづくと、少年の両親は、もう老人がすっかりサラオになってしまったのだといった。G サラオとはスペイン語で最悪の事態を意味することばだ。少年は両親のいいつけにしたがい、別の舟に乗りこんで漁に出かけ、最初の一週間で、みごとな魚を三匹も釣りあげた。老人が来る日も来る日も空の小舟で帰ってくるのを見るのが、少年にはなによりも辛かった。かれはいつも老人を迎えにいき、巻網や魚すや銛を、それからマストに巻きつけた帆などをしまいこむ手つだいをしてやった。帆はあちこちに粉袋の継ぎあててあったが、それをマストにぐるぐる巻きにした格好は、永遠の敗北を象徴する旗印としか見えなかった。（上掲書、福田恒存訳、p.5）

（中略）

この男に関するかぎり、なにもかも古かった。ただ眼だけがちがう。それは海とおなじ色をたたえ、不屈な生気をみなぎらせていた。

「サンチャゴ」少年は小舟を引き揚げてある砂地を登りながらいった、「また一緒に行きたいなあ。金もいくらかたまったもの」

これまで老人は少年に魚をとるすべを教えてきた。そして少年は老人を慕っていた。

「いけないよ」老人はいった、「おまえの乗りこんでいる舟には運がついている。仲間と一緒にいるこったな」

「でも、覚えているだろう！　八十七日も不漁がつづいたあとで、ぼくたち、三週間ずっと毎日、大きなやつを何匹も釣ったことがあったじゃないか」

H「覚えている」老人はいった、「知っているよ、お前が離れていったのは、おれの腕を疑ったからじゃない」

「おとっつぁんだよ、いけないといったのは。ぼくは子供だ。言うこと聞かなくちゃならないんだ」

「わかってるよ」老人はいった、「そういうものさ」

I「おとっつぁんには人を信じることができないんだね」

「そうだ」と老人はいった、J「だが、おれたちにはそれができる。そうじゃないかね？」

「うん」と少年はいった、K「テラス軒でビールをおごらせてくれないか、道具はそのあと運べばいい」

「よしきた、漁師仲間に遠慮はいらないものなあ」老人は応えた。（上掲書、福田恒存訳、pp. 6-7）

以上をまとめると、下線 6 と 8 ～ 11 の英語原文では主節の主語として三人称または一人称の代名詞 He, I, He, we, I と we がそれぞれ用いられているが、対応する日本語訳では F（「かれは年をとっていた」）のように日本語でも三人称単数の

主語が示される場合と、H（「覚えている」「知っているよ」）のように一人称単数の主語が示されない場合がある。下線 9 の He hasn't much faith に対しては、I「おとっつぁんには人を信じることができないんだね」のように主語 He が少年の父親であることが分かるように日本語訳されている。下線 10 では一人称複数の we が用いられているが、下線 9 の He との対比がある関係で , 対応する日本語訳 J の前半の「おれたちにはそれができる」でも「おれたち」が日本語に訳されている。他方、下線 11 にはそうした対比がなく、対応する日本語訳 K では「テラス軒でビールをおごらせてくれないか、道具はそのあと運べばいい」のように主語の訳出はされていない。順序が戻るが、最後に下線 7 の英語原文と日本語翻訳 G について触れる。下線 7 は原文中の *salao* の語義について説明したものだが、福田訳の定義には、この語がスペイン語由来であることを補足説明しているという配慮が見られる。

II 原典としての英文エッセイと自然な日本語訳

この節では、第二言語獲得を扱った Sprang のエッセイ Can monolingualism be cured? の筆者訳「モノリンガリズムは矯正できるか」について観察する。出典の詳細は次のとおりである。

Can monolingualism be cured? [Chapter 32] by Katherine Sprang, cited from *The 5-Minute Linguist: Bite-sized Essays on Language and Languages*, Second Edition, edited by E.M. Rickerson and Barry Hilton（2012）, Equinox Publishing Ltd.

本書は言語学に関するエッセイを集めたもので、当該エッセイは第 32 章（pp.140-143）にある。第 I 節で取り上げた小説の文体とは異なり、比較的 formal な文体が用いられている。本エッセイの冒頭付近から以下に 2 つのパラグラフを引用し、筆者訳を添える。

12 When we ask ourselves why it takes so long to learn a foreign language, it is easy for us, as adult language learners, to envy children. 13 They learn language as part of learning about the world; their minds absorb the words, phrases, and sentences they hear while they are playing or exploring—and with no apparent effort. Language learning is the child's exciting full-time job for the first few years of life: no studying necessary, and no homework!

L 外国語を学習するのになぜ非常に長い時間を要するかを自問自答する時、大人の言語学習者として、子どものことをうらやましく思うのは想像に難くない。M 子どもは世界についての学習の一部として言語を学習する。すなわち、子どもの心は遊びや探検をしながら聞こえてくる語や句や文を吸収するからで、しかも、特段の努力を必要としない。言語学習は子どもの人生の最初の数年間にとってわくわくするような全操業的な仕事である。勉強の必要も宿題もない。

14 But don't forget that even with that sponge-like ability to absorb linguistic information, children have to hear and use their mother tongue for thousands of hours in order to master it; it typically takes them over ten years before they're fully capable of non-childish everyday language use. Adults usually don't have that much time to spare, but that doesn't mean that we can't learn languages and learn them very well. 15 In some ways adults have an *advantage* over children. First, some elements of language can be categorized, analyzed, and explained, and these can be learned by adults more rapidly than by children learning their first language. Second, because we already have a language, adults can use what we know of our first language to organize our learning of the sounds, words, grammar of the new one. We don't start from scratch when we learn another language.

N しかし、そうしたスポンジのような言語情報を吸収する能力があるにしても、子どもは何千時間もの間、母語を聞いて使用する必要があり、そうしないと母語をマスターできないことを忘れてはならない。一般に日常において子どもっぽさのない言語使用を完全にできるようになるには十年以上の歳月を要する。大人は通常それほど余裕の時間はないが、言語を学習できないわけでもしっかりと学習できないわけでもない。O いくつかの点で大人は子どもをしのぐ利点がある。第一に、

言語はいくつかの要素に分類でき、分析して説明することができるが、これらは第一言語を学習している子どもよりも大人のほうがより早く学習できる。第二に、すでに言語を獲得しているため、大人はその第一言語の知識を使用して、新たに学習している言語の音声、語彙、文法の学習を組織的に行うことができる。別の言語を学習する時にゼロからスタートするのではないということである。

ここで上掲した英文エッセイの自然な日本語訳についてまとめてみよう。下線 12 の英語原文の従属節における主語 we と主節の for us は、対応する日本語訳 L が示すように訳出をしていない。また、下線 13 の主語 They を機械的に「彼らは」と訳さずに、文脈から得られる明確な解釈および基本的に単数と複数の区別がない日本語としての自然な表現を考慮して、日本語訳 M「子どもは世界についての学習の一部として言語を学習する」のように翻訳している。さらに、下線 14 の英語原文は否定の命令文で、動詞 forget の補部として that 節が生じており、その内部には主語 children が full NP（代名詞などを用いず、それ自体で十分な意味内容を示す名詞句）として用いられている。この場合も、日本語訳 N が示すとおり「・・・子どもは何千時間もの間、母語を聞いて使用する必要があり、そうしないと母語をマスターできないことを忘れてはならない」の下線部のような自然な日本語に翻訳している。最後に、下線 15 でも full NP としての adults と children が対比的に用いられており、対応する日本語訳 O でもそれを反映して「いくつかの点で大人は子どもをしのぐ利点がある」という訳をあてている。

III 文脈依存度と日英語主語の差に関する考察

この節では、第 I 節と第 II 節の事実観察をふまえ、英語から自然な日本語に翻訳する際に見られる、文脈依存度と両言語における主語の義務性の差との関係性について考察する。文脈依存度とは、例えば主語が、言語内の他の要素（例えば動詞）やディスコースから情報が与えられるために表現されない場合と、言語外の状況や場面、社会制度、習慣や文化などから情報が得られるためにわざわざ表現する必要がない場合の両方がある。

まず、限られたデータに基づくものであるが、第 I 節で取り上げた 2 つの小説と第 II 節で扱ったエッセイとの間には後者の方がより formal であるという点で文体の違いはあるものの、定形節において基本的に英語は主語を義務的に必要とする。しかし、文脈依存度の高い日本語にはそうした制約はなく、必要な時に主語を明示するという傾向が文体差にかかわらず観察され、加島詳造、福田恆存、佐々木一隆の三者の間では基本的に同様の見解の一致が見られることを確認できた。

次に、英語と日本語の時制節における主語の義務性そのものについての違いを述べれば、英語は構造的に義務的であるが、日本語では義務的ではなく、むしろ強調や対比などの積極的な理由がないかぎり、主語を明示しないのが普通である。なお、今回の比較観察を通して、定形節ではないものの英語の分詞構文にも文法的主語の明示を抑制する働きがあることが分かり、興味深かった。

こうした比較の視点は、方向を逆にして日本語から自然な英語に翻訳する場合にも適用できるものと思われる。すなわち、必要な時にのみ主語を明示する特徴をもった日本語を自然な英語に翻訳する際にも意義があるということである。

最後に本論文からの示唆として、言語学的には語用論と統語論の相互作用に寄与しうる可能性があり、言語教育においては英語や日本語の学習や翻訳に貢献する可能性が見られる。

おわりに

本論文は、英語で書かれた 2 つの小説と 1 つのエッセイの原典がどのように自然な日本語に翻訳されるかを観察して、文脈依存度の視点から英語と日本語間でどのような構造の差となって生じるかについて考察することを目的とした。

小説については、第 I 節で Lardner, OLD FOLKS' CHRISTMAS の加島祥造訳と Hemingway, *The Old Man and the Sea* の福田恆存訳を観察し、エッセイについては、第 II 節で第二言語獲得を扱った同書第 32 章の筆者自身による訳について観察した。以上をふまえ、第 III 節では、英語から自然な日本語に翻訳する際に見られる文脈依存度と両言語における主語生起の差について考察し

た。特に、定形節に生じる主語が英語では基本的に義務的であるのに対し、日本語では対比や強調など特別な理由がないかぎり、主語を明示しないのが普通であるという点に焦点をあてて論じた。その結果、文脈依存度の二面性があること、日英語に見られる主語生起の差は小説とエッセイの違いにかかわらず観察されること、英語の分詞構文にも文法的主語の明示を抑制する機能があることも分かった。

最後に本論文は、言語学的に語用論と統語論の相互作用に寄与しうる可能性があり、言語教育においては英語や日本語の学習や翻訳に貢献する可能性が見られることを示唆した。今後もこうした研究を継続したい。

引用文献

江川泰一郎（1991）『英文法解説』改訂三版、金子書房 .

佐々木一隆（2005）「意味と形式に関する覚書：日本語とベトナム語の時間表現」宇都宮大学国際学部編『宇都宮大学国際学部研究論集』第 19 号、pp. 107-111.

佐々木一隆（2019）「比較の視点でみる日本語：アジアの諸言語や英語との相違点と共通点」宇都宮大学国際学部編『宇都宮大学国際学部研究論集』第 48 号、pp. 31-38.

引用例文出典

“OLD FOLKS’ CHRISTMAS” by Ring W.Lardner, from *Fifty Great American Short Stories*, edited by Milton Crane（1965）*Fifty Great American Short Stories*, edited with an Introduction by Milton Crane, Bantom Books, 1965, 2008.

The Old Man and the Sea by Ernest Hemingway, Numitor Comun Publishing（Kindle 版）

“Can monolingualism be cured?” by Sprang Katherine（2012）. In Chapter 32, *The 5-Minute Linguist.* Second Edition by E. M. Rickerson and Barry Hilton, Equinox Publishing Ltd., 2012.

『微笑がいっぱい』（*There Are Smiles* by Ring Lardner）加島祥造訳、新潮社、1970 年

『老人と海』（*The Old Man and The Sea* by Ernest Hemingway）福田恆存訳、新潮文庫、1966 年

Contextual Dependency and a Comparative Study of Subjects in English and Japanese: With Focus on Translation from English to Natural Japanese

SASAKI Kazutaka

Abstract

This article aims to make an attempt to consider some relation between contextual dependency and syntax by comparing subjects in English and Japanese with focus on translation from English to natural Japanese. Generally, languages vary in syntactic structures according to the degree of contextual dependency. For example, English basically requires a grammatical subject to be present in a tensed clause, whereas Japanese does not necessarily require such a subject to be present in the same environment—mainly because it is more dependent on the context in the broader sense (including the social/cultural situation in which a linguistic item is used) than English, and thus especially when the "implicit" subject is more accessible from the context.

In order to confirm such relation between the degree of contextual dependency and syntactic behavior, we will observe three Japanese passages, all of which are partially translated from the three English original texts given below in the Sections I and II. Then we will consider these observations by focusing on the occurrence of explicit/implicit subjects in both languages in Section III, and finally make concluding remarks.

Section I: Two English novels and their Japanese translations

1 OLD FOLKS' CHRISTMAS by Ring W. Lardner, from *Fifty Great American Short Stories*, edited by Milton Crane (1965)

2 *The Old Man and the Sea* by Ernest Hemingway, Numitor Comun Publishing (Kindle)

Section II: English Essay and Its Japanese Translation

Can monolingualism be cured? [Chapter 32] by Katherine Sprang, cited from *The 5-Minute Linguist: Bite-sized Essays on Language and Languages*, Second Edition, edited by E.M. Rickerson and Barry Hilton (2012), Equinox Publishing Ltd.

Section III: Consideration: Contextual Dependency and a Comparative Study of Subjects in English and Japanese

Concluding Remarks

（2020 年 11 月 2 日受理）